

㊦ 2611日は反省の日々

昭和 63 年、生駒台小学校長を命じられ、新任校長研修講座を受講しました。県内の小・中学校と県立学校の新任校長全員が受講するこの講座では、法令や実務についての講義や演習で学び、小学校部会では当時の小学校長会長の講話がありました。

それから 4 年が過ぎた平成 4 年の 5 月、N 小学校長会長が東京で開かれる理事会に出席されるため、この仕事が私に回ってきました。翌年は K 会長の代理で、平成 6 年と 7 年は自分の仕事としての計 4 回、「対象となる先生は必ず替わっていますから」という研究指導主事の言葉があり、自分自身のたくさんの反省とわずかの実践を報告し、新任の校長先生に期待することのいくつかをお話ししました。以下は、平成 7 年 5 月の「2611 日は反省の日々」と題した話の概要です。

.....

辞令交付から間もなく 2 か月、「こんなふうになりたい。あんなこともしてみたい」と温めてこられた抱負の実現に日々努力されておられることと思います。私がこれからお話することは、そんな願いを持ちながらできなかったことの集成、すなわち、2611 日間の反省です。それに、普段から心がけていること、やってきたことのいくつかを付け加えたいと思います。

校長としての第 1 歩を踏み出したとき、先輩校長にいろいろな指導を受けました。そのほとんどができなかったことでした。まずこのことを少しお話します。

1 つ目は「1 度決めたら変更するな」でした。最終決定が校長の仕事であるというのです。しかし、現実には迷いがいっぱい、「これでいいかな。ああかな。こうかな」の日々でした。「やっぱり、こうしょ

う」と変更したことがありました。関係する人たちに不信の念をいだかせたに違いないという苦い反省が残っています。でも、「過ちでは則ち改むるに憚ること勿れ」という言葉もあります。大切なことは「自分が最終決定をするのだ」の心構えでの意思決定なのです。このことを教えてくださったY先生の堂々とした態度が、「あのようになりたい」という羨望の思いとともに思い出されます。

2つ目に「校長がちりを拾っていてどうする」があります。「校長はリーダーであり管理職である。現場で仕事して何になる。そのため配置されている多くの教員をどう働かせるかが校長の職務だ」というのです。でも、ちりが落ちていると、つい手が出るのです。それはO課長補佐に学んだことのようにです。私が落ちていることを知りながら通り過ぎたちりを拾われるO課長補佐の姿を見たときでした。1人の行動が、それを見ていた人にちり拾いをさせる。そんなこともあります。1人の校長が率先してちりを拾うことで何十人かの教師が動き、何百人の子どもたちが自らちりひろいに努めることもあるのです。

3つ目は、「校長は経営者だ、指揮官だ」があります。「最高責任者に遠慮は不要である。一々職員の思惑を考えておれるか」があります。でも、そうおっしゃった校長が、1人1人の状態に目を向け、部下の思いに細やかな気配りを見せておられたことを、私は知っています。

4つ目に「子ども1人1人の名前を覚えること。それは修学旅行の車中でできることだ」があります。これはT先生に言われたことでした。私には人の顔を覚える中枢が欠落しているのではないかと思うほど苦手な仕事です。「とてもできません。堪忍してください」と謝りました。とても大切な仕事であることは確かなのですが、私にはできないことでした。

5つ目は「汗かけ。恥かけ。文を書け」です。たしかに冷や汗はか

きました。でも働いて流す汗はいまだに不十分、恥はまずい判断による恥でした。「文を書け」は少々できたかなと思いますが、このことについては後ほどお話ししたいと思います。

よく似た言葉に、「智恵出せ。汗出せ。辞表出せ」があります。県の小学校長会役員会に、課長の代わりに出席したときのことで、S会長のあいさつは、この言葉で始まりました。「校長は智恵を出せ。汗を出せ。智恵も汗も出せない校長は辞表を出せ」とおっしゃったのです。「智恵の出ない指導主事、汗を流して働いていない指導主事は辞表出せ」と言われた気がして、鳥肌がたったことを思い出します。

今、私は「自分の個性を生かすこと」が大切なのではないかと考えています。表面だけ真似ても駄目なんだ、がんばることは必要だけど、付け焼き刃では仕事にならないのです。そう言うとき「それは開き直りじゃないか」と言われるかも知れません。でも、自分なりのやり方がある、自分にしかできないやり方があるとも思うのです。「個性を生かす」は子どもにも、教員にも、校長にも大切なのです。

以上、たくさんの反省をお話しました。「じゃあ、竹中は何もしていないんだ」と思われるかもしれません。次に、「考えたこと・やってみたこと・やってきたこと」のいくつかをお話することにします。

ある日、1年生の子どもたちが校長室にやってきました。先生に引率されての社会科の学習です。「校長先生のお仕事は何ですか」と聞かれました。なんて答えたらいいのだろうと思いました。自分の仕事を子どもたちにうまく説明できない、困っていたら担任のT先生が、こんなふうに話してくれました。

「校長先生は学校で一番えらい先生です。どんな学校にしたらいいだろうって考えてくださっています。先生たちも分からないことがあれば、聞きに行ったりご相談に行ったりするのです」

それは、私自身がどきどきする答えでした。顔が赤くなり汗が出てきました。そして、そんな校長先生になりたいなあと思いました。

今、私は子どもの声を聞くことのできる耳を持ち、存在感のある校長になりたいと思っています。「校長先生は何組なの」「あのね。きょうね」といった話しかけに答え、「いっしょに行こうよ」という誘いに、進んで行動できる先生になりたいと思います。子どもたちを温かく受け入れながら、必要に応じては厳しい叱責もできる先生でありたいと願っています。

私は校長ですが、教員であることには違いがありません。教員免許を持つ管理職です。管理職としての仕事とともに指導職としての仕事を務めたいと思っています。ところで、校長が教員として子どもたちに話をする、指導をする、というときにはこれまでと違うプレッシャーがあります。それは多くの教員の目です。「このことをどうお話しされるのだろう」「どんなふうな例を出してこられるのだろう」という注目を集めます。教師に見つめられる教師なのです。

ですから、全校朝の会での講話を大切にしてきました。本校では毎月1日に行うことになっている会です。「毎月1回ということは、定年までの4年だと…」と計算しかけて気がつきました。1月や4月のように1日がない月もあります。結局、32回ということになりました。変更はあるかもしれませんが、今年の計画を持っています。それぞれの内容を十分に吟味し、話し方を工夫したいと考えています。できれば、「あんなふうには話せばいいんだなあ」「あのような話をしてみたい」と先生たちに思わせたいと考えています。面と向かっての朝の会、テレビを使つての集会、それぞれに工夫が必要です。ときには小道具も準備します。朝の会ではありませんが、避難訓練のときの話はマイクなしでやりました。いざというときにそんなものがあるはずがないの

ですから。運動場の向こうは近鉄奈良線の線路です。声を張り上げ、電車が通過するタイミングを見計らって話しました。

いつの間にか保護者のお父さんの年齢になりました。そんな中で、私は「子育ての指導者を目指したい」と思っています。「こんなときにどうすればいいのでしょうか」という相談を受けたときはもちろん、いろいろな場を使って積極的に子育てについて話ってきました。授業参観中にも私語が目立ち、中にはガムを噛みながらの参観者もあるという時代です。こうした風潮を正し、学校と家庭、地域とが連携しての子育てを進めるためにいろいろな工夫が必要になってきています。

そんなことを伝えていくために、今、私は学校だよりを出していません。生駒台小学校での「でんしょぼと」、生駒小学校での「すくすく」です。行事などのお知らせではありません。教育というものについての考え方、生駒小学校の教育方針や今やっている取り組み、子どもたちのすばらしい活動、学校のすばらしさを伝えていくミニコミ紙です。そして、学校から教育情報を発信し、学校のスポークスマンとしての役割を果たしたいと考えています。

最後に、私の好きな言葉「進みつつある教師のみ、人を教える権利あり」を申し上げ、不幸にして志半ばで倒れた校長の無念さを思い、先生方が健康に十分留意して活躍されることを期待したいと思います。私に与えられた時間はあと 30 秒になりました。

「校長先生の話は長いなあ」では困ります。決められた時間を守る、それは話をする者の責務でしょう。これからは、そんなことにも配慮して、子どもたちに、先生方に、保護者の方々に必要な情報を発信し、学校をリードして行ってください。ちょうど時間になりました。皆様のご活躍をお祈りして、私の話を終わります。